

西郷隆盛の「王道」と「霸道」

西郷隆盛は征韓論に敗れて鹿児島に下野。同時に、「尊王愛民」を精神とする私学校を旧薩摩藩時代の鶴丸城内に開いた。江藤新平の佐賀の乱の収束間もない頃である。西郷を崇める生徒の蟄集する私学校は明治政府にとって頭痛の種であった。

私学校生徒は、薩摩が中心ではあったものの、全国から設立の噂を聞きつけて屈強の不平士族が入りこんでいた。明治十年の初めには、政府が薩摩の内情偵察のために潜入させていた密偵が私学校生徒により捕獲、逆上した生徒は鹿児島政府火薬倉庫を襲撃、乱入、破壊、残る武器弾薬のすべてを奪い取り、西南戦争が勃発した。

密偵の西郷暗殺の口述書をもって西郷のところにあられた桐野利秋が、大久保利通の独裁政治を口をきわめて罵る顔を静かにながめて、西郷は、「おはんが、そげに焚きつけてくれずとも、おいどんな、もはや、さからいはせぬ」といい、その夜の作戦会議に西郷は出席したものの、一語も発することはなかったと池波正太郎は『西郷隆盛』（角川文庫）の

渡辺利夫（公益財団法人オイスカ会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任（二〇一〇年十二月退任。二〇一七年六月より現職）。

中で記している。

西郷は、佐賀の乱はもとより、熊本の本神風連の乱、萩の乱のいづれにも呼応することはなかった。私学校生徒の挙兵にも積極的に応じたというのではない。「霸道」は西郷の道理とするところではなかった。私学校生徒の挙兵の報せが、大隅半島小根占で狩猟をしていた西郷に届いた時の一言目が、「しまった!!」であり、二言目が「ただ、天でござすよ」であったと池波は書いている。

西郷は、霸道を最後の最後までおしとどめ、「王道」に生きようとしたものの、これを私学校生徒に徹底させることかなわず、ついに霸道に踏み入ってしまった。西郷は臍を噛み、その後はもう「死に場所」を求めて戦陣をさまよったというのが真実にちがいない。福澤諭吉は、西郷のその姿の中にマルチルドム（殉死）をまぎれもなくみて『丁丑公論』を執筆したのではないのか、というのが私の見立てである。『丁丑公論』をそうみていいのかどうか。心ある読者よ、提示してほしい。